『東京史』へのさまざまな批評に接して——秋の大運動会の余韻

源川真希（東京都立大学）

はじめに

都市学者のリチャード・フロリダは、よくいわれることだがと前置きしつつ、本を出版するというのは自分のフューネラルに参列するようなものだと述べている[1]。それはまわりの人が自分をどうみてきたのかが、何となくはっきりする機会だ。本を上梓して人々の目にふれない限り、自身では絶対にわからない自分についての情報もある。特に新書という形で大小の書店に並ぶのであってみれば、さまざまな目線で批評されるはずであり、フロリダの言葉はなるほどと思う。だがあまりそこに参列したくはない。むしろ企画の発案者である西山雄二さんがその趣旨を伝えるために使用した言葉を使って、本を出すのは「秋の大運動会」[2]に参加するようなものであるといいたい。読書会当日はあらゆる種目に出させてもらい、全力で体を動かした気分であった。もちろん厳しい指摘もないわけではなかったが、終了後の第二ラウンド（南大沢駅前の居酒屋での懇親会）も含めて実に楽しかった。もともとあまり運動会で活躍できなかった私にとって、数少ない良い思い出としての大運動会になりそうだ。

ここでは皆さんからいただいたコメントへのお答えを記しておきたい。これは基本的に当日のものを復元したものである。あとから考えると時間を意識して十分答えられなかったことも多く、補足したいこともある。さらには事後的に思いついたことも少なくないので、それらは注に落としておいた。その意味でここでの注は、出典を示すため、補足的な解説のため、それに弁解のためにつけてある。

1

皆さんからのコメントや質問は多岐にわたっており全部には答えられなかったが、以下はその応答の記録である。

竹原幸太報告に関して。最近、関東大震災の朝鮮人虐殺否定論がある。本当に彼らが暴動を起こし井戸に毒を投げ込んだので殺害されたという言説である。歴史の教科書でも虐殺があったことを説明しており、以前は歴史教育の場でもきちんととりあげられていたが、最近はどうなのか少し不安がある。歴史学研究に即していえば虐殺は事実に相違ないことであり、それをふまえた教育がなされていることを信じている。

外国では街並み全体を保存することもあるが、日本はどうなのだろう。京都などでは古い街をそのまま保存している所もあるが、東京はこれを意識的に行っているわけではない。鉄筋の建物は保存のための財政措置もあるが、木造家屋の古い街並みをそのまま残すことがあるのだろうか。日本家屋の特質や防災の観点もあるわけだが。しかしヨーロッパの都市では、空襲で破壊された街をそのまま復元するこ

---

[1] Richard Florida, *The New Urban Crisis*, Oneworld, 2018, p. 244.

[2] この企画は、西山さんによれば人文社会学部の教室横断的なイベントの試みであり、「各分野の先生が、現代史の研究書を読んでコメントするとどうなるか。秋の大運動会的な、フェス的な催事」であった。

とが少なくなく、ここは誰々の生家だと表示されていたりする。もちろん地震対策を日本ほど考えなくてもよいのだろうが、文化としての街並み復元という考えがある。東京にも関東大震災後に建てられた家屋が残っている区画もあるが、何らかの文化的政策として残していきたい。鉄筋建築では、本書で紹介した市政会館（日比谷公園、1929 年）のようなみごたえのあるものがある。現在の都心の再開発は、都市再生と称して経済的目的を優先させる形で行っており、古い街はその文化的意義を考慮されずにどんどん破壊されていく[3]。

石川求報告では、1970 年代の歴史が中心的に言及された。筆者もだいたい共有できる時代である。この 70 年代というのは東京だけでなく世界史的な転換点である。1967 年から 1979 年はいわゆる革新都政の時代であった。この時代のまんなかの 1973 年前後に世界は大きな転換点を迎える[4]。美濃部亮吉知事はまさに「革新」という時代のシンボルだったけれど、のちの時代には彼は反面教師として扱われていく。石原慎太郎都政（1999 年誕生）は、美濃部が創った（と思われた）ものを壊すことをひとつの目標にした[5]。美濃部と同じ頃、大阪府でも革新の黒田了一が府知事となったが、そこが現在は「維新の会」の拠点となっているのだ。この転換こそは現代史研究者としてぜひ追究したい論点である。

原田なをみ報告は言語学の観点からの『綴方教室』の分析であった。作文のなかにある子供のしゃべり言葉を理論的に解明するというのは大変興味深かった。豊田正子の下の弟である光男について、私は本書において 3 歳か 4 歳と書いた。おそらく数え歳なので満でいうと 3 歳ぐらいだとすると、これまでの音韻識別能力に関する研究で明らかになった結論との整合性が出てくる。それとこの家族は、父母とも埼玉県（北葛飾郡）から東京に出てきており、舞台である葛飾区など当時の東京市の東側では、方言も入り混じった言葉（東京語[6]）になっている[7]。

---

[3] 竹原報告の「修復的都市史」という問題提起を、東京における「被害」と「加害」を歴史的に理解するという意味でとらえると、本書であげた事例を再構成するなかでそれは可能になると思う。

[4] 近年、マスコミなどで田中角栄のポジティブな評価が目につく。確かに「国土の均衡ある発展」という観点から田中の果たした役割は大きい。とはいえ、私見では田中は「都市政策大綱」（自民党）のなかで、地方開発推進（日本列島改造論につながる）を掲げる一方で、民間資金の動員による都市再開発政策を構想している。これは「大きな政府」の限界を見据え、いずれ来るであろう「小さな政府」化をひそかに準備したものである。1980 年代の中曽根政権による都市再開発政策の展開は、田中のシナリオによって実現したともいえる。

[5] 石原は 1975 年の都知事選で美濃部と対決して敗北した。この選挙で石原は、選挙カーに映画俳優である弟の裕次郎と一緒に乗って都民にアピールした。

[6] 「うさぎ」を評した鈴木三重吉は、選評のなかで正子の父と母の会話を「東京語」と呼んでいる（豊田正子『綴方教室』木鶏社、1984 年、39 頁）。余談だが私は最近、南大沢駅前の古本市で、偶然この「うさぎ」とその選評が掲載された雑誌『赤い鳥』（第 4 巻第 4 号、1932 年 10 月号）の復刻版を入手した。

[7] その他、正子が上の弟である稔と「エイゴごっこ」をする綴方があり興味深い。正子が「みのぼう、お前、そんなら、おなべのことをなんていうの」と聞くと、稔は「ええ、えっと、それは、ええとチカプカだよ」という。正子は「そんなエイゴってないやい」といいつつ、たらいのことは何というか聞く。たらいは「タカチクタ」だという（豊田前掲『綴方教室』、60 頁）。昭和初期の小学生である彼らがネイティブの発音を聞いたことがあると思えない。それから数十年後に生きた私自身もネイティブの発語を初めて本格的に聞いたのは、中学生になって国内外のラジオ放送を受信する趣味を持ってからである。FEN やたまに海外からかすかに聞こえる短波放送である。この綴方には、昭和初期の子供の、英語というより何らかの外国語、あるいは耳慣れない言葉のイメージが出ているのだろう。

2

大杉重男報告について。まず路面電車は1900年代から1970年代までが全盛で、これはまさに日本の工業化の時代である。それを支えた勤労者の足としての電車は、モータリゼーションの進行とともに衰退していく。また日比谷焼打事件（1905年）以来、東京などでは何度か都市民衆騒擾が発生した。そして1970年代には学生と警官の街頭での衝突がみられた。しかし都市を舞台としたプロテストは以後みられなくなる。これは工業化の終焉と照応しているのではないか。この点は石川報告で述べられた1970年代の政治史的位置とも関連する。

IT化の進展によって東京という都市自体もヴァーチャル化するとの指摘があった。次第に「東京」は表象になっていくということ、確かにその可能性は大いに想定できる。しかし実際は、今のようにどこにいてもインターネットで情報のやり取りはできるとしても、むしろ都心には超高層のオフィスビルがどんどん集まっている。特に大都市の一部のエリアに、金融の中心地が集中していく現象は世界中で進んでおり、これは今後も続くのではないかと思う。

本書に多く出てくる「国民」という語について。これは歴史学において1990年代から2000年代において議論された、「国民国家」論という研究の枠組みと関連している。それまでは一般の人々のことを人民、民衆などの用語をあてて論じていた。この「国民国家」論は特に20世紀に入る前後、彼らがさまざまな形で国民化されることを指摘している。日露戦争の講和をめぐって日比谷で暴動に参加した男性たちは、選挙権など持っていない。しかし彼らが戦勝国意識を持って国民化されていくことが重視されるべきなのである。

『綴方教室』は、もともと先生が子供の作文に手を入れる過程を解説したものなので、やはり同書においては「あるべき子供」像、美談が語られているのではないかといわれた。確かにそうであり、大木先生の指導は子供にかなり細かい手直しを要求するものだった。その意味で作為ある美談的なテキストとも読めるのだが、豊田正子の実際の生活は小学校を出て工場に働きに出ても向上しないし、親が彼女の稼ぎに頼る状況も続く。やはりハッピーエンドではなく、そこに美談ではすまないリアリティを感じるのである。

それから米価騰貴の際には、米商が襲われることがあったが、これは実際に米を奪って食べるのが目的であるというより、お約束を守らせる行為であった。米価騰貴において有力者が民衆に対する救済を行うべきだという規範だ。災害や飢饉において統治者や有力者が、困窮した民衆を救うのがあるべき統治（仁政）であり、近世の百姓一揆も含めて、民衆の暴力はこれがなされないことへのプロテストという性格を持っていた。以上のようなことが近年の研究で指摘されている。

青島幸男都政の位置づけをどう考えるか。1990年代のなかばというのは、日本経済においてはバブル崩壊後の停滞の時代で、東京都も財政的に困難を抱えていた。また行政の面でも「経営」が重視されていく。他方政党政治も流動化していて、鈴木俊一都政最後の知事選では自民党中央と鈴木を支持する都連が分裂し、青島も政党の支持を受けずに当選する。次の石原慎太郎も自民、民主の支持を受けた2人の候補者を下して勝利する。そして都の財政難が続くなかで青島時代に始まった行政手法が全面的に展

開する[8]、こんな流れである。

東京 23 区のまんなかに位置する皇居の位置、これは本書で意識的に避けたが、もちろん空間的にも政治的にも大きな存在なのできちんとみる必要がある。ちなみに 2013 年頃、猪瀬直樹知事の時代に本学で「皇居学」なるものにかかわる授業を設けてほしいという声が、どこからか聞こえてきた[9]。このときは私も講義を担当した。

本書の最後でとりあげた『君たちはどう生きるか』であるが、確かにもともとコペル君は裕福な家庭の子弟であり、上からの男性目線であることは確かである。とはいえ本書では、豊田正子の目線も入れている。そうはいってもジェンダーの視点が弱いことは、新聞に掲載された日本近現代史研究者、藤野裕子さんの書評[10]で指摘されており自覚はしている。

ドイツ文学を専門とする金志成報告で指摘されたのは、東京に住んで東京都の大学に勤務している者が、東京史というものを書くのは、あまりに距離の近いことを扱うわけで、どんな意識で書いているのかというものであった。執筆主体の立場性にかかわるご指摘だった。その点では私は東京出身者ではなく、いくつかの地方都市に住んでいたので、東京というのはある種「あこがれ」の対象であったと述べておきたい。「東京へ行く」というのが特別の意味を持っていた。もうずいぶん長く東京に住み働いているのだが、実はいまだに「客分」意識が強い。

そして次に東京における対抗文化という点である。歴史を振り返ると先に議論になった 1970 年代には、東京にもそうしたカルチャーがあったことを指摘したい。街頭での学生の動きなどである。今はそうでもないが、東京は時代によってはカウンター・カルチャーを生み出す場だった[11]。また東京という表象は、いろんな意味で東京以外の人々を惹きつける面が大きかった[12]。

3

左古輝人報告において述べられた、そもそも「東京」とは何かということ。これは大杉報告での指摘にも関連する。ちくま新書編集部からの執筆依頼を受けて、一応東京の近現代史を書くという意識はあったが、「東京」とは何かをずっと考えていた。もちろん空間的な位置もそうだが、歴史の問題としては工業化から脱工業化、あるいは日本資本主義の展開のなかで、「東京」をどうみるか。つらつら考えるうちに、将来「東京」ではないものを扱った「反東京史」を書かなくてはいけないと感じた。「東京」とい

---

[8] これが当時、都立大学、都立短期大学、都立科学技術大学、都立保健科学大学の統廃合と新大学の設置が政策化される背景でもあった。

[9] 結局、「皇居学」を換骨奪胎する形で、全学共通科目のオムニバス授業「江戸・東京と江戸城・皇居」をそれから数年間実施した。都市計画・地理・自然・歴史などの側面から東京を論じたもの。

[10]『朝日新聞』2023 年 8 月 5 日朝刊。

[11] 終了後の懇親会で本学部の学生の参加者から、神宮外苑再開発への反対運動などは、都市を舞台にしたプロテストの動きとして重視すべきではないかと指摘を受けた。そのとおりである。なお私は 2023 年 7 月 19 日のニコ生「深掘 TV」（「東京を深掘する」）に出演する機会を得て、宮台真司さんらとこの問題について議論した。

[12] ベルリンと東京、それに西山さんが指摘しているパリと東京の比較には今後ぜひ取り組んでみたいと思う。

う表象の意味はいまだにはっきりわからないが、でも「反東京史」を書かないと自分の目標は達成できないだろう。また七つの章で論じたことを立体化してヴァーチャルに表現するというご提案、そうした試みを自分でもぜひやってみたいと思う。終章において本書で論じたことを通史的に述べたものの、もう少し立体的に叙述すべきだったと思うので、なお一層そうした試みには心がひかれる。

圷洋一報告について。まず近代初期の思想家の貧困観が現在のそれにつながるというのは、まったくそうである。昨今しばしば聞かれる自己責任論に近いものがある[13]。本書で使った社会都市という概念は、もともとドイツ近代史で用いられ、20 世紀の都市における「生存配慮」のための社会政策やインフラ整備の政策が、ナチ時代のあと戦後西ドイツにおける社会国家の形成につながるという議論である。本書ではそれをヒントに社会都市の形成、展開という観点から東京の行政を考察し、1999 年誕生の石原都政ぐらいから「企業都市」的なものに向かったのではないかと論じた。

最後の石田慎一郎報告は、本書カバーにある宣伝の文章のなかで「まったく新しい東京史」とうたっているわりには、この本の新しさがどこにあるのかわからないと、遠回しだが厳しい批判を行った。私としては七つのテーマで個々に論じつつも、最後に終章で明治維新から現在までを通史的におさえたつもりであり、これが本書の新しさだと自負している。また私が街に残るさまざまな「痕跡」に注目していることを指摘されている。例えば現砂町水再生センターの高い赤白煙突である[14]。まさにこれは私がこだわった視点である[15]。

おわりに

以上八名の方の論評に十分答えられたか不安であるが、注と合わせて今のところの回答とさせていただく。全学共通科目「人間・文化・社会」は人文社会学部で行われている学問の良さを学生に伝えるよい機会となっている。今回の読書会も私自身にとっては、諸学問の方法や問題のつかまえ方を再認識する大変に有意義な会であった。最後に企画を立案し当日の進行をつとめて下さった西山雄二さん、新学期開始直後のお忙しいなかで拙著を読み批評をして下さった皆さんに、あらためて御礼申し上げたい[16]。

---

[13] 2012 年度の学部の演習で、1881 年に『朝野新聞』と『東京横浜新聞』誌上で行われた、公費による貧困救済をめぐる論争をとりあげ、新聞の論説を読み解きながら議論した。リーマンショックから東日本大震災の発生という時代であり、学生の関心も大きかった。また近代日本の民間団体の福祉活動についても、仏教系、キリスト教系の団体の活動を含めて、卒論のテーマとしてとりあげた卒業生は多い。

[14] 石田さんの指摘のとおりこの煙突は役目を終えて解体される予定だという。ただし 2023 年 12 月中旬の段階ではまだみることができた。

[15] 石田さんから八王子の位置について質問されたが答えられなかった。八王子は貿易港横浜に生糸などを送り出す拠点であり、その意味で日本の近代産業の重要な地点であった。東京府における八王子の位置は、まず府内（都内）では東京市に次ぐ第二の都市であり三多摩の中心であった。1920 年代、東京市は自治権拡充のため「東京都」として独立する動きを示すが、その際ほぼ現在の 23 区から都を構成し、それ以外の地域は別の県として切り捨てる計画だったので、八王子他の三多摩地域から猛反対の声が上がった。その意味では、八王子からの視点は、「東京史」の反面である「反東京史」を描く際に重要になるかも知れない。

[16] 西山さんが言及する東京都章を公的な行事などでもあまりみなくなった。とはいえ、今でもマンホールのふたに刻まれているのを発見することがしばしばある。また日本橋の欄干に獅子のような動物がいるが、この動物が手にしている盾のようなものがこれ（東京市章）である。現在の橋は 1911 年に造られた。